

ソード・ワールドRPG

サイランド・サガ

Siland Saga

ダイジェスト・リプレイ

『鷲と杉の木』

ACRAP・編
シナリオ作 海保
リプレイ著 海保

目次

目次	2
まえがき	3
キャラクター紹介	4
冒険の舞台	5
本編	6
第 1 章 ロツソのアインザッツ	6
第 2 章 旧き大熊のバラード	8
第 3 章 シオマネキのラブソディ	11
第 4 章 ハノノー市からクレッシエンド	15
第 5 章 流血のパーティータ	17
第 6 章 番人たちのファンダンゴ	20
第 7 章 闇の無限旋律	27
第 8 章 汚れた生命のレクイエム	32
あとがき	34

まえがき

時間的には先ほど『サイランド・サガ』第1部を書き上げ、ノっている間に第2部も手がけるだけ手がけてしまおうということで、まえがきです。

あらすじとしては

「フォーセリア西方の島サイランドのリンド村で古代王国の遺跡が発見された。遺跡を巡り、出会う冒険者達。そして、遺跡探索、そして戦いの後、一枚の謎の金属でできたプレートを手に入るのだった……」

とこうなります。

で、今回ですが前はダイジェストリプレイという形式でリプレイ作成の短縮化を試みましたが、結局3ヶ月かかってしまい、当初の目的は達成されませんでした orz

うーん、ダメだったなあとか思っていたのですがこう考えたのです

「リプレイを最初からテープを聴きながら書くのだから時間がかかる。ならばまず最初にシナリオに基づいてリプレイの構成だけを書き、テープを聴きながら内容を埋めていったら？」

なるほど！確かにそれなら全体を俯瞰した上でキーポイントとなる部分のプレイを抽出しやすいし、面白かった所も見つけやすい！

コレだ！コレなんや！俺が求めていたのは！

ということで、やってみまーす。

キャラクター紹介

- ・ ハイドン(人間、ファイター&レンジャー、♂)



人間なのだが、サイコロの目による異様な器用・敏捷・知力の低さにより外見中身ともにドワーフとしか思えない。ドワーフに見えてドワーフにあらず！その正体は人間！でもドワーフと言われると怒る。

パーティー随一の戦士であり、戦闘では主軸となるが中の人々の性能により戦闘以外でも主軸となってしまう。

ちなみに今回は懐かしいあの斧と出会う事になる。

- ・ キト=バミアン(エルフ、ヒーラー&シャーマン&ソーサラー&セージ、♂)



名前をそれぞれ反対に読むと、性格おのずと知るべし。最高の木偶(デク)を作る事に命をかけている。が、マスターの力不足もありその設定を中々活かさなくて困ってる。いわゆる「設定をもてあます」という状態になりつつある。

能力値がエリートで特に敏捷度は人間では最高の 24 になる。ちなみに続けて読むとヒー！ジャーマンソーセージ。

- ・ ウェイク(人間、プリースト&ファイター、♂)

NOW
PRINTING

前回マスターであったI氏がプレイヤーとして参加。チャ・ザのプリーストとして前章のジャンドルフに代わって登場。ある程度発言を制御する事が出来るようになったようで、ここまでリプレイを読んでいて困った感はありません。ただし興奮すると他のプレイヤーの言葉を奪う事が判明

- ・ ロツソ(ハーフエルフ、シャーマン&シーフ、♂)

NOW
PRINTING

人間の年に直して 19 歳だが、記憶喪失で 2 年前以前の記憶が無い。トレジャーハンターとして生計を立てている。シーフ&シャーマンのハーフエルフの熱血漢。物語の主人公として最有力だったがプレイヤーである私がマスターになったため、自動的にNPCとなり、主人公じゃなくなりました。イトコどりのNPCを目指す予定。位置づけ的にはクワトロ・バジーナと覚えてくれれば早い。

¹ 機動戦士Zガンダムより。クワトロ・バジーナ=シャア・アズナブル、カミーユのよき先輩として、また自身も優秀なMSパイロットとして活躍。赤とか金色とか。ちなみに百式のコンセプトは「百年使えるMS」だが、F91の時代に百式は使われていないのでやっぱりダメだった。

冒険の舞台

この物語の舞台はアレクラスト大陸ではなく、フォーセリア西方のサイランドという国である。



冒険者達はリンド村の遺跡から謎のプレートを発掘した。その後、クッキ市にてこのプレートの調査を行っていたが、調査結果は芳しくなくそのままクッキに滞在している所から物語は始まる……

本編

第1章 ロッソのインザッツ

タイトルとは異なり、話はウェイクから始まる。ウェイクはチャ・ザのプリーストであり、前作のジャンドルフの兄弟子にあたる。ウェイクはクッキ市に滞在しているが、弟弟子にあたるジャンドルフがクッキ市に滞在している(ちなみに、前回最後の訪れた都市がクッキ。バカばかりだ)

さて話はPCサイドになる。PCはクッキに滞在しており、調査をしている。バットとジャンドルフはリンド村での生業があり、帰った(笑)(H「また、突然追いかけてくるかも知れないな」)。

マスター「さて翌日、目が覚めるとロッソがいなくなっている」
ハイドン「タバコでも吸いに行ったかな？(笑)」
マスター「それは中の人。ちなみに荷物もない」
ハイドン「ロッソの荷物はどうした？キト、お前に言ってるんだよ」
キト「俺が知るわけないだろう。」
ハイドン「そうだなあ、宿の人に聞いてみるか。」
マスター「さて、ちなみにウェイク、君もこの宿に向かって歩いているんだがいきなり、グラグラと揺れだした、地震。震度4～5くらい」
ハイドン「待て！それは縦揺れ？横揺れ？(笑)」
ウェイク「それは重要なのか？」
マスター「縦だけど。」
ハイドン「縦揺れ！？」
キト「朝からお盛んだな…(笑)」
ハイドン「じゃあ、机の下に入るよ」
マスター「廊下だから机は近くはないんだが…周りはちょっと騒いでいたがしばらくすると治まった。」
ウェイク「最近地震が多いな！」
マスター「いや、多くなかったよ。」
ウェイク「…久しぶりの地震だな！(笑)」
ハイドン「じゃあ、当初の目的通り主人に話を聞こう」
主人「いやあ、すごい地震でしたねえ」
ハイドン「うむ。時に主人。ロッソがいないのだが」
主人「お連れ様なら、急いでいたらしく、朝早くに出て行きましたよ」
ハイドン「何！？何の断りもなく…様子は変でなかったか？」
マスター「などと話しているところに君(ウェイク)がやってきた」
ウェイク「主人、この宿にジャンドルフという男が泊まっていないか？」
主人「昨日帰られましたよ。ちょうどこの方々がジャンドルフ様と一緒にいた方ですが…」
ハイドン・キト「えっ！？(笑)」
ハイドン「もし、そこのチャ・ザのプリースト。ジャンドルフを追っているのか？」

ウェイク「追っているという程大げさなものではないのだが・・・奴を取り戻しに来たのだが・・・」
ハイドン「ふうん、何をしたとは聞かないが・・・」
ウェイク「ロクな事はしていない。」
ハイドン「あいつなら担当のリンド村に帰ったぞ。」
ウェイク「リンド村か・・・まあ居場所がわかっただけでもよしとするか。君達は奴の知り合いか？」
キト「うーん・・・」
ハイドン「知っているか知らないかと言われれば知っているのだが・・・前回ちょっと縁があつてな」
ウェイク「また何かやらかしたのか!？」
ハイドン「うむ。」
キト「色々²」
ウェイク「神に仕える身でありながら・・・墮ちるところまで墮ちたものだ」
ハイドン「あっ!!」
ウェイク「どうした!？」
ハイドン「部屋に戻って荷物を調べるよ。あのプレートは？」
マスター「ない。」
ハイドン「なああああああつ!?(笑)」
ウェイク「そのプレートって何だ？」
キト「前回の冒険で見つけたのだが・・・」
ハイドン「くそっ! ふん捕まえてやる! そうとなったら聞き込みだあ!」
キト「うむ!」

聞き込みの結果、西の門から出て行ったということがわかった。

ウェイク「この街の事なら俺に聞いてくれ。」
マスター「まあ、こここの寺院の人間だからね。」
ハイドン「・・・実は仲間に裏切られたらしくて(笑)、前回の戦利品を持ち逃げし、西の門から出て行ったらしい」
ウェイク「そうか・・・盗人を看過する事は教義に反するな。俺も少しの間だが協力しよう。」
ハイドン「そうか、助かる」
ウェイク「俺の名前はウェイク!!」
ハイドン「わしの名前はハイドン!!!」
ウェイク「いい名前だ・・・ドワーフか？」
ハイドン「ドワーフではないっ!!! (笑)」
ウェイク「そちらは？」
キト「私の名前はキト。お前はいい素材ではなさそうだ・・・(笑)いや、こっちの話だ」

さて、お約束になりつつあるやりとりの後、ロツソを追ってクッキから西に向かった一行である。クッキ市西のアウラ川上流のキヨク村に向かうことになった。

² そろそろツッコムがひどい言われようだ。ジャンドルフも哀れな。



図 1 ロツソを追って…

<おまけ>

宿の主人「お客様、宿代を…一人10ガメルです」

ハイドン「あ、そうか。うむ。」

宿の主人「お連れ様の分も」

ハイドン「ええ！？あいつ払っていないのか？…アンのガキがあ〜！」

キト「殺す！」

ウェイク「更にお連れ様の弁当代まで…2ガメルです(笑)」

マスター「(いいなそれ)それ採用」

キト「借金だな…12ガメル…10日で1割(笑)」

さて、借金取りとなって、ロツソを追いキヨク村へ向かうことになった一行である…

第2章 旧き大熊のバラード

キヨク村に向かう一行だが、2日ほど旅を続けた時、ジナスとコノハという名前の女性二人組の旅人に遭遇する。

ジナス・コノハ「ごきげんよう」

ウェイク「これこれこういう者に遭遇しなかったか？」

ジナス「遭遇しましたよ。昨日に」

キト「一人だったか？」

コノハ「一人でしたね。」

ハイドン「徒歩で」

コノハ「徒歩です。とても早い徒歩です(笑)」

ハイドン「じゃあ俺が遅らせているんだ、敏捷度7だから。」

キト「俺敏捷度24なのに…(笑)⁹」

ジナス「で、その男がなにか？」

ハイドン「いや、たいしたことはないのだが…」

などと話しているとキトが一瞬魔力を感じた。(キト「女性でも木偶は木偶だ(笑)」)

また会う予感を感じながら、一行はジナス・コノハと別れた。

そして更に3日ほど経過してキヨク村に到着した。キヨク村は人口100人ほどの小さな村でアウ

⁹ ちなみにロツソの敏捷度は21。キト一人であれば追いつくことも可能であったが、ハイドンが思いっきり足を引っ張っているということである。

ラ川の上流に位置している。ちなみに、ウェイクは自分の管轄地域⁴であり、面が割れていない事からロツソの行方を聞き込みする。

(ウェイクが頑張って聞き込みをして)ロツソは既に昨日にこの村を去っているという情報を掴むことができた。しかも、船でアウラ川を下り、ハノー市に向かっていったらしい。

PCも船で追おうとするが・・・

ハイドン「実は俺たちもハノー市に向かいたいのだが、船を出すことができないだろうか？」
村人「それがねえ、この前の地震でハノー市に遺跡が出たらしいんですわ。それで西ネイル古代遺跡調査団が派遣されて、その人たちが船を使って行っちゃったんですよ」
キト「船ではいけないか・・・陸路だとどれくらいかかる？」
マスター「まあ、3、4日くらい」
ハイドン「うーむ・・・どうしよう・・・このへんに3、4人が乗れる船を持っている人はいないだろうか？」
村人「いるにはいるんですが、これ以上借りられると私たちの生業も成り立たなくなるので・・・」
ハイドン「金は払う！！(笑)」
キト「もう引退した爺さんとかいないの？」
マスター「いやあ・・・使える船はホント、取られたんだぜ。」
キト「大丈夫、ガンコおやじの一人や二人いるはずだ！(笑)」

と、ガンコおやじがいるかを探し、見つけた。

村人「うーん・・・グラムじいさんならもしかしたら・・・でも偏屈だからねえ」
ハイドン「じゃあ、行ってみよう」
マスター「グラムじいさんはいない。船もない(笑)」
ハイドン「がんこなだけの奴に用はない！！(笑)」

仕方なく陸路でアウラ川北辺を下っていくことになった一行。キヨク村から遠くなるに従って湿地帯に突入する。ということに気がついたのはキヨクを発って2日目

(キト「液状化現象・・・」ハイドン「違うって」)

(ウェイク「湿地帯・・・リザードマンか。言葉通じないぞ？」マスター「勝手に出すなよ(笑)」)

マスター「君達が湿地帯を歩いていると、いきなり濃い霧が発生した」
ウェイク「おいキト！もうちょっとゆっくり進んでくれ、お前の姿が見えん！」
キト「お前らの足が遅すぎるんだ・・・だからな、右足が沈む前に右足をな・・・(笑)」
マスター「という風に歩いていて、ハイドン、君が一番後ろにいたんだが、気がつくとな二人の姿が見えなくなった」
ハイドン「ウェイクーッ！キトーッ！・・・全く、あいつら・・・」
マスター「と、歩いているといきなり霧が晴れた。気がつくとな丘の上にいる」
ハイドン「むむ？どこじゃここは？」
(キト・ウェイク「°*アハハハ。:*ウフ°*(°▽°) °*:.アハハハ。:*°°」)

⁴ それぞれの神官は自分の担当地域を持っている。ウェイクは自分の管轄地域と主張しているが、こんな下っ端がこんな遠く離れた小さな村の管轄なわけではないのだが、面倒だからツッコまずに先に進める。

(ウエイク「ラン、ランラランランラン・・・ラン、ランラランランラン・・・」⁵)

(ハイドン「丘じゃねえ・・・(笑)」)

マスター「で、丘の上の方に何かがある」

ハイドン「じゃあ、フラフラと近づいていく」

マスター「さて、近づいていくとわかるんだが、丘の上の方に白骨化した動物の死体がある」

ハイドンはこの状況の認識についてロールを行う。

マスター「そもそもだな。今の状況は妙に違和感がある。おとぎ話で聞くような異界に紛れ込んだような感じがしている。で、動物の死体なんだが、近づくとわかるが白骨化した熊の死体」

(ウエイク「熊？まさか・・・」)

(ハイドン「知らないから。世界が違うだろ」)

マスター「あと、斧が一振り残っている」

(キト「ま、まさか！カチ割り丸！？」)

ハイドン「じゃあ、一歩一歩気をつけながら足を踏み出して白骨化した熊の死体に近づくよ」

マスター「特に何も無い。もう目の前には斧がある」

ハイドン「・・・どうしよう？斧を持つか。」

マスター「斧を持ちました・・・すると、斧の名前がわかりました————カチ割り丸です」

懐かしい名前にPC達一同は嬉しくてしょうがない(LOTRのリプレイを参照)

ハイドン「この熊には悪いがもらっていこう。」

マスター「そうすると、霧が晴れてこいつら(ウエイク、キト)が見える」

ハイドン「あ、あんなところにいた。オーイ！」

ウエイク「お、おいハイドンお前声はすれども姿は見えずじゃないか、どこにいるんだよ！？」

キト「下を見てみる(笑)」

マスター「ウエイク、キト、君らはハイドンの声は聞こえるが、姿は見えない」

ウエイク「おい、ハイドン、お前の方からこっちにこい！こっちはお前の姿が見えねえ！」

ハイドン「クロスボウを足元に撃ってみるよ」

ウエイク「うおっ！あぶねえな！」

ハイドン「これが野伏の戦い方だ！！(笑)」⁶

ウエイク「バラールッ！！(笑)」

ハイドン「じゃあ、満足したから下りていく(笑)」

このようにして、強力な(+2ボーナス相当)カチ割り丸が継承され、ハイドンの手に渡った。

⁵ お馴染み(だと思う)『風の谷のナウシカ』。そういえば現在『ゲド戦記』公開中だけど、これが微妙だのなんのって・・・



⁶ 前回にも出てきた台詞だし。ハイドンの中の人相当気に入ってるなあ・・・LOTR RPG 第2部参照。

<カチ割り丸の伝説>

その昔中つ国と呼ばれる国に指輪の伝説あり、数多の英雄と闇の戦いを描いたものである。その英雄の一人に太古の熊の血を引き継ぐフドーリンという者あり。彼の者、衣服を纏わずただ一振りの斧と葉っぱのみで闇の勢力と戦った。フドーリンの持つ一振りの斧は銘を『カチ割り丸』といい、エルフの作りし豪斧なり。何十匹ものオークの首を斬り飛ばし、闇の乗り手に対しても一歩も怯まず対峙した…

という伝説の斧である。持っても裸になるわけでもない。

第3章 シオマネキのラプソディ

こうして旅路を急ぐが、何も障害が発生しないわけではない。

ウェイク「じゃあ急ごう、川を船で下っている以上、奴の方が早いに決まってる」

マスター「などと言っていると、雨が降り出した」

ウェイク「雨が降ったから休もうか。」

ハイドン「賛成！（笑）どこか雨宿りできそうば場所は？木とか」

ウェイク「キトとか」

マスター「まあ、一応あるけど…強度は問題だが」

ハイドン「地蔵さんのほこらとか」

マスター「そんな都合のいいものはない！」

ウェイク「こんな時レンジャー⁷がいればなあ…」

ハイドン「俺レンジャー⁷だけど何か？（笑）」

さて、レンジャー⁷がいたので成功判定（ロール）を行い、木や葉っぱで仮り宿を作り、その雨宿りをする。

マスター「さて、そうして雨宿りしているが雨が止む様子はない」

ウェイク「今何時？」

マスター「夜だね」

ウェイク「夜か…じゃあ、今日はこれ以上動くのはやめよう。ここで野営する。」

さて、そうしてここで一晩過ごすPC達だが2番目に見張りについたウェイクが何か気づく。（しかも6ゾロ）

ウェイク「キュー⁸！」

⁷ レンジャー＝野伏。職業の一つ。ソードワールドでは事実上兼職できるのでハイドンは戦士でもあり野伏でもある。野伏の特徴は野外行動と弓および狩りのエキスパートであるということで、現在のような野外での旅には何かと欠かせない。ちなみに解説を重ねると、森のような地形で隠密させればレンジャー（野伏）の右に出るものはなく、過去の（LOTRで）森で野伏の奇襲を行った。どこから飛んできかわからない矢のインパクトがあり、そのために「これが野伏の戦い方だ！」が名言になっている。みたい。

⁸ ガンダムネタだね。宇宙に適合した新人類であるニュータイプは敵・悪意の存在を感じ取ることができる。その時の擬音がこのキュー（略）ン！

マスター「何者かが…君の後をつけていて…遠くから見られているのだが。」
ウェイク「俺の前はキットか。キット、ちょっと！」
キット「俺を起こすのかよ！ようやく寝たばかりなのに…」
ハイドン「この章のタイトルは、『初めての殺意ね』(笑)⁹」

キットがエルフの特殊能力である夜目、そしてシャーマン技能のセンスオーラ¹⁰によって生命のある何者かが遠くから監視しているとわかる、だけである。しかし、何かをする様子もなく、この晩はそのまま過ごし、朝になる。PC 達は雨の中、何者かに尾けられながら進む。

マスター「翌日の朝方、雨が激しくなってきたんだが…<危険感知>！」

ここではハイドンが奇跡の6ゾロを起こす

マスター「じゃあ、ハイドン、前方に何かがいる。」
ハイドン「むむ？」
マスター「と思ったら右後方にも何かがいる」
ハイドン「むむむ？」
マスター「と思ったら左後方にも何かがいる！」
ハイドン「むむむむ！？(笑)」
ウェイク「これは…」
ハイドン「囲まれているぞ…？敵の数は？」
マスター「まあ、向こうも近づいてきているが前方が3、右、左後方が2。要は12時方向に3、8時に2、4時に2！」
ハイドン「わしは前方、キットは4時方向、ウェイクは8時方向だ。円陣を組め。」
ウェイク「内側を向いて？(笑)」
マスター「で、接近してきたんだが、普通の人…外見は。シャーマン、センスオーラ」
キット「よし。」
マスター「うーん、生きてはいるんだが、意識を感じない」
キット「なるほど…これは、木偶だ！(笑)」
マスター「で、真ん中の奴が「プレート」を寄越せ！」
ハイドン「プレート？生憎と持っておらん！」
マスター「「嘘をつくな。ならばカづくで奪うまで。」で、こいつらの右腕が異様に発達して大きな爪を持つ手になった。」



⁹ ごめん。

¹⁰ シャーマン＝精霊使い。魔法使いの系統の一つである。ソーサラーが知識によって魔法を行使するのにに対しシャーマンは自然の精霊の力を借りて魔法を行使する。その特殊能力の一つとして、周囲の精霊の力を感知する力がある。これがセンスオーラ。この力によって生命(の精霊)の有無を感知することもできる。-----

キト「タイラント?」
 マスター「まあ、外見的に一番近い。ちなみに、その筋肉のつき具合といい、キトが魅せられる、
 かもしれない」
 キト「(サイコロを振る)……理想的な強化の仕方だ……どこかなあれは?どこを突けばあなるの
 かな?ここかなあ?(笑)」
 ハイドン「おかしいおかしい」
 マスター「さて、おもむろに襲ってきたよ。」
 ハイドン「道理の通じる相手ではなさそうだ！」

そして、戦闘開始となる。(図 2 包囲されています)

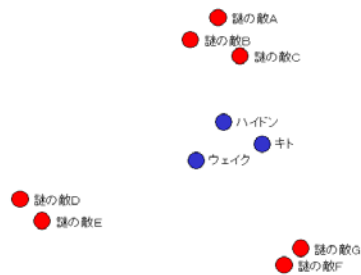


図 2 包囲されています

まずはキトが『スリープクラウド』をA, B, Cに対して唱える。これによりA, Bが睡眠状態になる。
 ウェイクはEに対して矢を放ち、命中させて高いダメージを与える。そしてこの後敵が一斉攻撃をし
 てきた。しかも**全員命中**。この結果防御力に乏しいキトがダメージを受け、しかも爪に仕込まれた
 毒によってよろめいてしまう。(キト「ピョピョピョ……」)

その後ハイドンによる反撃で謎の敵Cは一撃で倒される。(ハイドン「すごいぞ!このカチ割り丸
 は!俺に任せろお!」)(図 3 最初のラウンド)

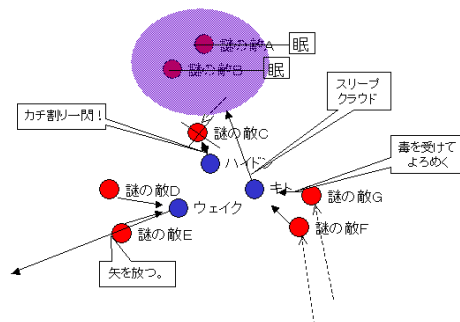


図 3 最初のラウンド終了

” バイオハザードより。こんな敵。



次のラウンドキトは行動不能のため(キト「レバガチャ中(笑)¹²⁾)ウェイクが行動する。ウェイクは2発目の矢を放ち、Eを仕留める。残ったD, F, Gはそのままウェイク、キトに攻撃する。ウェイクは何とか防御したが、キトは更に2匹の攻撃を受けてしまい、再び毒を受ける。毒の効果はランダムなんだが、今度は…

マスター「笑い出す」

キト「アッハッハッハッハ！ウヒヒヒヒ、ヒーツヒツヒツ！(笑)」

ウェイク「こりゃもう魔法は唱えられないな」

マスター「そうだね。この状態だと、魔法も唱えられないし、攻撃にもペナルティね。」

キト「攻撃なんかするか。アハハハハ！(笑)」

この最中、ハイドンはちなみにDを仕留めたが、

キト「カチ割り丸がカチ割ってるよー、ハハハハハ！(笑)」

ということで、さりげなくキトがピンチのまま戦闘は進む

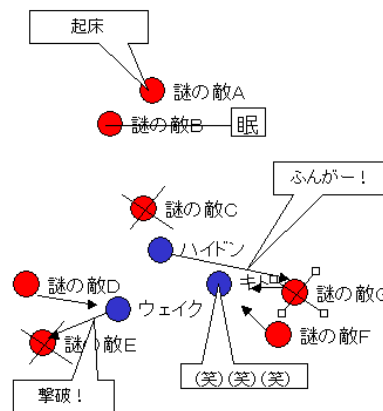


図 4 キト(笑)(笑)(笑)

続くラウンド、キトは笑いながら防御行動(パリー)をし、ウェイクはDに対して矢を放つ。またしてもハイドンが一人をし止める。(図 5 笑いながら…)

¹² レバーと左右に振りつつ、ボタン連打すること。レバーをガチャガチャするからレバガチャ。対戦格闘ゲームのダメージを食った後の起き上がりを早める時などに使う。ちなみに、この前のキトのセリフ「ピョピョピョ」は行動不能状態の擬音。元はストIIから。ちなみに写真はストI (カプコン)



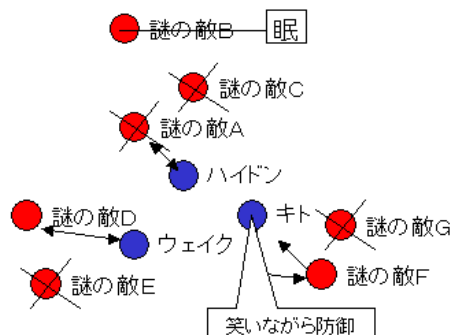


図 5 笑いながら…

次のラウンドにはウェイクがDを倒した。これにより大勢はほぼ決した。(Fがキトに猛毒を与えて大ダメージを与えたり、ウェイクが『キュアウーンズ』でキトを回復したが)結局最後はハイドンのカチ割り丸が会心の一撃を起こし、戦闘に勝利した。

マスター「さて、全員を倒したが、しばらくすると敵は腕を中心にポロポロと崩れ去っていった…」

キト「完全ではなかったか…」

マスター「お前が言うな(笑)さて、戦闘中の人はロールをしてくれ」

結果、ハイドンのみ成功した。

マスター「ハイドン、ふっ飛ばしている間に遠くにジナスとコノハを見たような気がする。もう今はいない」

ハイドン「もういないのか。おい、お前達、戦闘中にチラ見たんだが…」

ウェイク「パンツ見えたか？」

ハイドン「ジナスとコノハが、チラッ、みたいな(笑)」

キト「マジで？やばくね？」

第4章 ハノノー市からクレッシェンド

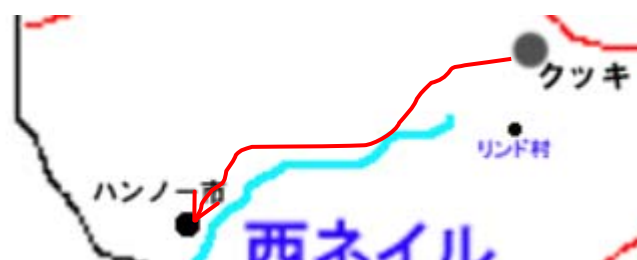


図 6 PC一行の足跡

マスター「さて、ここでもうすることもないので(敵消えちゃったしね)、君達は旅を続け、ハンノー市に到着した。」

ウェイク「はあ～、着いた着いた。」

ハイドン「こんな所まで来ちゃったのか…(図 6 PC一行の足跡)」

マスター「ここで経験点1000点ね。¹³ついでに、ハノー市は大きな街でお店も整っています。なので普通の装備の調達は可能です。ということで休憩」

<CM>

あのカストゥール時代に何があったのか？その謎がついに解き明かされる？

ソードワールドRPGカストゥール編、第1話「緋色の律動」、リプレイ好評発売中！

<CM終わり>

ハノー市に到着した一行。装備を整えるついでにロツソの消息を探し始める

ハイドン「とりあえず宿を取るか・・・俺たちは面が割れているからな」

キット「そんなに人口は少ないのか？」

マスター「全然。宿屋は何件もあるよ」

キット「あのプレートを持って行くところなんてそうないだろうしな。」

ウェイク「まあ、あのプレートを狙っている奴らは複数いるってことだな。」

ちょっと待て、ロツソも入っているんだな、それに。(マスターの心の声)

ウェイク「そして、追っかけている連中はお前らが持っていると思って追いかけてきているんだな。迷惑な話だ」

キット「はた迷惑だのう・・・」

ウェイク「そういえば、近くの遺跡ってのはどうなったのかな？」

マスター「(まあ聞き込みすればすぐ分かったことにすればいいか)それがね、この前の地震で地盤が崩れて遺跡が出てきたということになっている。アウラ川に近い場所に遺跡が見つかった」

ウェイク「で、その遺跡を調べるために調査団が来た、と。」

マスター「来たというか、もう調査を開始しているようだ」

ハイドン「ロツソの動きとは何か関係があるのだろうか・・・？ロツソは遺跡に来ているのだろうか」

ウェイク「来てくれないと困るな」

ハイドン「前の村と同じでロツソが宿屋にいるかどうか調べてくれないか？」

ウェイク「そうだな、調べてみるか。これこれこういう風貌の男が泊まった事はないかい？」

マスター「了解。調べてみたが、ロツソが泊まったという情報はない。」

ウェイク「泊まっていないのか。見かけたという事は？」

マスター「「いやあ、何しろ人間が多いからねえ。特に目立つ風貌でもないし・・・」」

ウェイク「そうだなあ、これだけいれば、だぜえ¹⁴」

ハイドン「その遺跡とやらに行ってみるか・・・。プレートも遺跡で見つかったものだしな。」

ウェイク「ひょっとして2個目とか3個目しかあるかもしれないな。だぜえ～」

ハイドン「じゃあ、ここで一晩泊まって、明日は遺跡とやらに行ってみようか。遺跡の場所は？」

マスター「噂話になっているからね。ここから南西に半日ほど歩いた場所に崖が崩れたところがあり、そこに遺跡が出現したと。」

ハイドン「・・・じゃあすぐに行ってみようか。」

¹³ まあ、一区切りなので経験点を追加した。一般的にはソードワールドRPGでは、一回の冒険につき経験は1000点というのが通例であるが、社会人プレイヤーだし、キャンペーンで強敵も出るのでどんどん経験を与える。

¹⁴ えーっと、キャラ作り？別に今更無理しなくてもいいのに。

そして、一行は半日ほど歩き、遺跡に到着した。遺跡の周りに調査団のいる様子はない。近づくと、遺跡の入り口である石造りの扉だけが露出している。周辺を(ハイドンがレンジャー技能で)調べてみたが、目ぼしいものは見つからなかった。

石造りの重い扉だが、鍵はかかっておらずハイドンが開け、一行は中に入っていった……。中は真っ暗なためウェイクがランタンを持ち、一行は柱のある回廊を抜け、下っていく……(図 7 遺跡に侵入……)

そして、突き当たりに扉がある。少し空いているその扉を開けると……

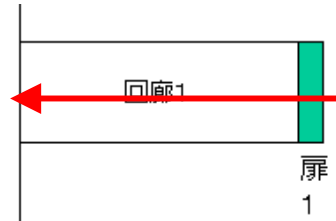


図 7 遺跡に侵入……

マスター「扉を開ける、構造的にはこんな感じで広い。が！」
 キト「中には？」
 マスター「中にはいろいろありそうだなと思って覗き込むと……みんな死んでる。」

第5章 流血のパーティータ

キト「なっ!？」
 ハイドン「うう！」
 ウェイク「こ、これは!？」
 マスター「中には10体以上の死体が転がっている。」
 ウェイク「何と言う……こいつらは例の発掘調査団か……」
 マスター「調べてみれば詳しく分かるが、そうだと思われる。セージ10人、護衛5人が殺されている」
 ウェイク「外傷は？」
 マスター「人にもよるが、切り裂かれたり、毒を受けたもの、絞め殺されたものなど。書類や道具も散乱している」
 ハイドン「人ではないということだな。」
 マスター「書類や道具も散乱している。調査団が何者かの襲撃を受けて全滅したということろだな」
 ウェイク「遺跡に入っていきなりやられたのか、こんな入り口で……」
 マスター「いや、携帯版の机とかもあり、むしろここに本部を置くつもりだったらしいね。だがまあ、結果は見ての通り」

一行は何があったのかを調べるためにこの部屋の調査を始める。やはり遺跡の調査団であった。書類なども燃えさされてしまい、目ぼしい情報はなかった。(図 8 血まみれの大広間)

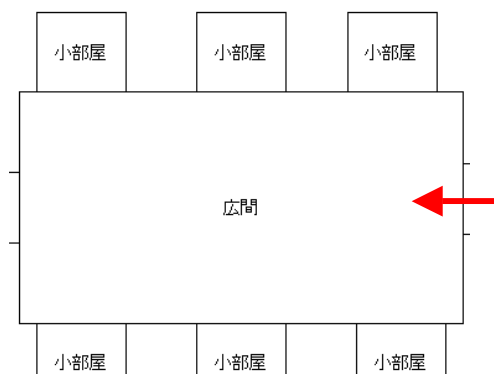


図 8 血まみれの大広間

さらに、小部屋も調べるがいくつかの部屋には死体しか存在しなかったが…その内一つの小部屋で、一行は…

マスター「この部屋には家具とかが散乱している。が、シャーマンの人、生命反応があります。」
キト「生命反応？何？じゃあ、ちょっと見てみよう」
マスター「ちょっと家具を動かしてあげると、小さい女の子、少女が気を失って倒れている」
ハイドン「なぜこんな所に少女が」
ウェイク「なぜこんな所に処女が…」
キト「遊んでねえで、起こしてやれ」
マスター「ちなみに、外傷はないよ。」
ハイドン「起きなさい！（笑）」
マスター「目を開けた。」
ウェイク「大丈夫か？」
マスター「……………(キョロキョロ)で、キョトンとしている」
ウェイク「俺はウェイク！！」
ハイドン「うるせえ、お前の名前なんかどうだっていいんだよ！（笑）」
ウェイク「むかつくう～、殺意を覚えた。」
マスター「二回目だ¹⁵。見てわかるが、口が利けなくなっているようだ」
ウェイク「ショックで口が利けなくなったんだろう。かわいそうに…」
ハイドン「こっちの言っている事はわかるか？」
マスター「頷いた」
キト「何があったか聞いてみよう」
ハイドン「喋れないんだって(笑)君はこの遺跡の調査隊に一人なのか？」
マスター「キョトンとしている」
ハイドン「この時代にいないのかな…？」
ウェイク「何でその方向に…、どうしても時空を超えたいらしいな」
マスター「今回は越えないって」
キト「世界は越えたけどな」

¹⁵ ごめん。この章もタイトル変えるのはもったいなかった。

ハイドン「君はハンノー市の人間か？」
マスター「キョトンとしている」
ハイドン「…キョトンが多すぎるぞ！！(笑)」
ウェイク「とにかくここにいるのは危険だから、とりあえず、ハンノー市¹⁶の教会で保護してもらってのは？」
ハイドン「どこの人間かわからないからな…」
キト「まあまあ、とりあえずここにいてもらって他の扉を調べようよ」

ということで、「謎の少女」を手に入れた！（RPG風）

などと、他の扉も調べてみたが、特に何も収穫はなかった。唯一虫の息の生存者がいたが、それも大した情報は得られない（マスター「この遺跡はあいつらに狙われて…がッ」一同「あいつらって何だ———っ！？」）

そしてこの大広間の西の扉は先に続く通路であった。

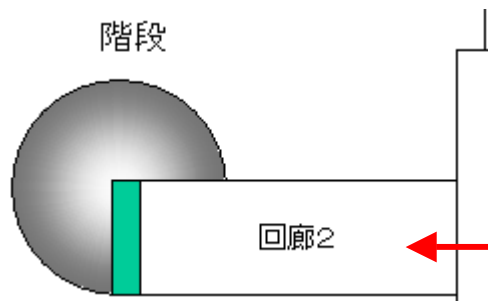


図 9 先へ…

マスター「扉を開けると先は通路」
ハイドン「先からまがまがしい気は…？」
マスター「そんな事言われてもわかんない(笑)」
ウェイク「女の子はどうするの？ここに置き去り？」
マスター「ついてこようとしている…(ころころ)ウェイクの服を掴んでついてこようとしている」
ウェイク「うわっ、なんか背中がずーんと重くなった！」
ハイドン「何バカな事言ってるんだ？置いてくぞ！（笑）」
ウェイク「どうしてもこの子ついてきたいらしいぞ。だぜえ～。まあ、オレとしてもあの場に置いておくよりは連れていった方が…」
ハイドン「すごい冒険者だったりして」
マスター「キョトンとしている」
ハイドン「君名前は？名前はあるんだろ？」
マスター「……キョトンとしている(笑)」
ハイドン「キト、その女の子から魔力を感じるか」
キト「とりあえず『センスマジック』。」
マスター「その少女から魔力は感じる」
キト「感じるぞ」

¹⁶ あ！ハンノー市じゃなくてハノノー市だつうの！

ハイドン「『コンフュージョン』¹⁷？」
 キト「違うなあ…念のため『センスエネミ』¹⁸もかけてみる」
 マスター「敵意は感じないね。」
 キト「とりあえず奥に行こうぜ」
 ハイドン「じゃあ、女の子は隊列の真ん中でね。」
 ウェイク「ついてくるものはしょうがないか。でも名前がないのは困るなあ」
 ハイドン「じゃあ、エミリンで(笑)¹⁹」
 そして、通路の奥にて一行は扉と階段に突き当たるが…
 マスター「えーと、扉に突き当たるんだが、扉は開いてる、というか壊されている。」
 ハイドン「どっちからどっちへ？」
 マスター「こっちから奥へと壊されている」
 ウェイク「と言う事は、この扉を無理やりこじあけて進んでいる奴がいる？」
 ハイドン「壊し方は？人間の力じゃない感じ？」
 マスター「そうだね、人間の力じゃないな。物理的ではあるけれど。」
 キト「とにかく気をつけながら進むしかないだろう。だぜえ～」
 マスター「……………何そのとってつけたような「だぜえ～」は？」
 キト「さっきから気になってるんだよ。(関わり合いになりたくないから)言うなよ！」
 マスター「ごめん、でもマスターとしては考慮に入れないと。これがプレイヤーだったら言わないよ(笑)」

第6章 番人たちのファンダンゴ

階段(螺旋階段)を10~20メートルほど下ると、扉に突き当たる。この扉もまた壊されていた。奥に行こうとするが、そこでいきなり明かりが点灯する。松明などではなく、魔法的な明かりである。(ハイドン「遺跡の機能だろうが、これで俺らが入ってきた事がわかってしまったか…」ウェイク「先に進むより他にないだろう…」)



図 10 通路の先には…

¹⁷ 対象を混乱させる魔法。混乱と言ってもソードワールドの場合は放心状態になる位でおいしい事はなにもない。押してはいけないボタンを押すとか、バナナの皮で滑って出前中のもりそばをぶちまけてしまうとか、エッチな気分になって服を脱ぎだしたりとか(違う)…そういうばハイドン(の中の人)！ハイドンはただの戦士なんだから魔法とか知ってちゃダメだろ。

¹⁸ シャーマン魔法の一つで敵意を感知する魔法。半径数メートルの危害を加えようという意思を感知することができる。「殺気！そこかあ！」というものののだが、魔法ということで詠唱があるため、マンガのような絵にはならない。ファイターレベルが高いと自動的にセンスエネミが作動しているとかにすればいいのに…

¹⁹ 数世代前のロールプレイングで登場した、容姿的に非常にハンディキャップを抱えている女性。以後容姿的に(略)の代名詞となっている。最初出したの俺だけ？

そして、通路の奥からウェイクが何かを聞いた。(図 10 通路の先には…)

マスター「扉に聞き耳をしても何も聞こえなかったんだが、奥の方から、ガシヤンガシヤン、うわー、ズサー、ベシャーとか」

ウェイク「おいおい、あっちから何か聞こえるぞ!？」

ハイドン「じゃあ、そっちへ小走りで行かう。女の子に危なくなったら逃げるんだぞ、と言っておいで」

マスター「キョトンとしている」

キット「だばだばと向かう。」

マスター「奥に向かうと、途中の扉は閉じているんだが、君らを襲ったような腕の敵が5匹、と…セージチェック」

キット「このシオマネキ野郎が!」

ハイドン「であったと思われる(笑)」

マスター「いいからセージチェックしろ」

ここでハイドンが何と6ゾロを出す

マスター「えーと、6ゾロか…これだとどうなるんだっけ？」

ハイドン「もう尻の穴までわかる(笑)」

マスター「ガーゴイル²⁰と呼ばれる化け物—尻の穴はないと思われるが—3匹と戦っている。」

ハイドン「どうすりゃいいんだこりゃ？」

キット「おとなしく観戦してようか。」

ハイドン「多分あいつらは侵入しようとしたんだな、どっちが優勢？」

マスター「ガーゴイル」

ハイドン「どうしようかな…」

キット「じゃあ、戦っている間に周りの扉を調べるか(笑)」

ハイドン「ガーゴイルは喋れないからな。蟹人間を一匹でも捕まえれば—」

などとぶつさ言っている間に時間切れ

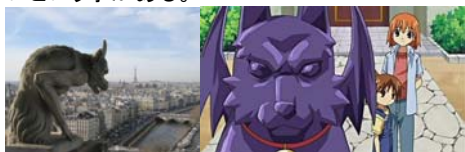
マスター「などと言っていると蟹人間(蟹人間じゃあないんだがな)、は崩れ去った。で、ガーゴイルと目が合った」

ハイドン「え? 目合わせないよ(笑)」

キット「じゃあオレ後ろ振り向く」

マスター「襲いかかってきました。」

²⁰ ガーゴイル(英語: gargoyle または gurgoyle)は建築においては屋根にある雨どいから流れてくる水の排出口をもった彫刻を指す。多くは翼と鉤爪を持つ怪物として作られており、ファンタジーRPGではこれらの石像は動きだして襲ってくる。のでガーゴイルというモンスター。初級の冒険者にはかなり手強い相手だが一行のように中級以上であればさして脅威ではない。ただし厄介な点として魔法のかかった武器あるいは魔法でないと傷をつけられないという事がある。



(『吉永さんちのガーゴイル』)

ガーゴイル3匹との戦闘がおもむろに始まる。



まずはキトが3人に『プロテクション』(防護の魔法)を唱える。ウェイクは弓をウォーハンマーに持ち替えて終了する。3匹のガーゴイルは編隊を組み、3人に1匹ずつ攻撃をする。戦闘能力のないキトにのみ命中し、いきなり致命打を受ける。しかし、この戦士(一人は兼聖職者だけど)は魔法使いを庇う気はないのか?そしてお待ちかねのハイドンはカチ割り丸によるカウンターでガーゴイルの1匹を軽い瀕死に陥れる。(左図。FF風に)

次のラウンド、キトは『ファイアウェポン』をウェイクのウォーハンマーに対して唱え、そのままウェイクはガーゴイルに攻撃するが、外してしまう。ガーゴイルは先ほどと同じフォーメーションで攻撃を行い、キトにまたしても致命打(キト「ガーゴイル…強敵だな」)。だから、戦士二人は(略。まあハイドンが屠ってくれるからいいのだが)と外した(キト「ドコをカチ割ってやがる!」)。

キトはそろそろ死にそうかもしれないので、防御行動を取る。せつかくの『ファイアウェポン』の甲斐もなくウェイクはまたしても攻撃を外す。

さてガーゴイル達は戦術を変えてきた(ウェイク「ジェットストリームアタック²¹、行くぞ!」)。マスター「ハイドンにジェットストリームアタックだ!ハイドンに全部行く。よけてえ。」

ハイドン「はあ〜〜〜?!」

この攻撃、2発が命中するがトータルで1点しかダメージを与えられなかった。(ハイドン「ぐふっ、1点くらった!父さんにも殴られた事ないのに!」キト「2度もぶったね!!(笑)」²²)



さらに次のラウンド。キトは防御し続け、ウェイクは命中するものの、せつかく強化しているのにダメージを与えられない。

ガーゴイル達は今度はウェイクに対してジェットストリームアタックを仕掛ける。(ウェイク「踏み

²¹ガンダムネタ。黒い三連星が使用した攻撃フォーメーションの名前。ちなみに、ガンダム(アムロは)1機目を踏み台にして2機目に対応してこれを倒しており、「オレを踏み台に!」はガンダム名台詞のひとつである。



²²ガンダム名台詞。細かい説明ははしるが、ガンダムが喜んでいてくれるといい。-----

台にしてやる！」マスター「いいから避けてろよ。」この攻撃は何と3発とも命中し、トータルで12点の大ダメージを受ける(並の人間なら即死)。

しかし、この攻撃を最後に、(踏み台にしたのかは知らないが)ガーゴイルの1匹をハイドンは仕留める。



ガーゴイルの攻撃でウェイク、キト共に重傷を負ったのでキトは防御行動をし、ウェイクは『キュアウーンズ』で回復を行う。ハイドンはこの二人を庇うために挑発を行うが…

ハイドン「おらこいよ。お前らなんかことりちゃんだよお～(笑)、おいで、ことりちゃん(笑)」

後から考えたら魔法生物で心がないので挑発に乗るわけないのだろうが、マスターが逆上したので(マスター「誰が小鳥だってえ！？(笑)」)のでガーゴイル2

匹がハイドンに攻撃する。が、全て防御してしまう。(ハイドン「ふん！小鳥小鳥ィ！(笑)」)これに対するハイドンの反撃は外れてしまう。どっちが小鳥なんだか。

以降、ハイドンが外しまくり、ウェイクもダメージを与えられず、頭に血が上ったガーゴイルもハイドンに攻撃するがジェットストリームアタックでないため当たらずダメージも通らずで、しばらく戦況は変わらない。が…、プレイヤー側が殴るだけなのでガーゴイルは戦術を変えて、ハイドンに噛み付く。

マスター「ハイドン噛み付かれた！5点のダメージ。」

ハイドン「5点！？ぐおおお！と言ってゴンと殴るよ。12点」

マスター「12点か…まだ生きているよ」

キトはここまでずっと防御をし続けていたが、しょうがないなとばかりに動き、『エネルギーボルト』²⁹を唱え、このガーゴイルのトドメを刺す(ハイドン「どっかから電撃が！」キト「何をやってんだお前ら。」。最後のガーゴイルもコンビネーションもできず、カチ割り丸によって一刀両断される。

ハイドン「結構疲れたな。こいつらここを守ってたのかな…？」
ウェイク「俺たちは小鳥なんかじゃない…グシャ(笑)」
ハイドン「この章のタイトルは『俺たちは小鳥なんかじゃない』ね(笑)」

さて、ガーゴイルとの戦闘も終了したので、一行は他の部屋の探索を始める。

²⁹ 名前の通り魔力の矢を放つ。魔法使いの初級攻撃魔法。マジックミサイルとか、ギラにあたるもの。無属性。ググったらかの有名なMMORPGリネージュに出てくるんだね。あの廃人ゲー

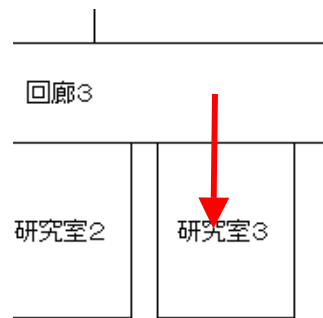


図 11 手前の部屋から

マスター「さて、この部屋。ガラクタばかりなんだが、奥の方に宝箱—というかただの箱だが—がある。」

ウェイク「これ開けられるのか？」

ハイドン「ウェイク、お前のウオーハンマーでつついてみる？」

ウェイク「ツツツ」

マスター「襲い掛かってきた」

ハイドン「逃げろ！ここに用はない。」

宝箱に化けていたモンスター²⁴による奇襲となるが、これによりウェイクは噛み付かれてダメージを負う。

キット「この化け物は何だか知ってるのかな…？セージチェック。」

しかし、サイコロの目は振るわない。

マスター「ああ～、こんなのいたいた！なんだっけなあ～、って感じ(笑)」

ハイドン「じゃあ、ぶん殴る。ウェイクに噛み付いていたんならぶん殴る！」

ハイドンがカチ割り丸でこのモンスターに攻撃し、瀕死のダメージを与える。更にウェイクが反撃を行うが、外れてしまう。ちなみに…

ハイドン「振りなおしたんだけどね。こいつ、一個机の下に落としたのをまた振って、そして外してやがんの。」

キット「ということはもうリプレイに書かれている！（笑）」

ウェイク「バレた！」

怪物の攻撃はウェイクに当たらず、最後はハイドンのカチ割り丸のクリティカルヒットで怪物は倒される。

マスター「粉々に碎けた。」

キット「さあて、中はどうかなあ～？」

マスター「魔晶石が2個(6点、6点)だね。それとサファイアが5個」

²⁴ 正式名称はチェスト・イミテーター。名前の通り本性は不定形であるが宝箱などに化けて侵入者を狙っている、古代王国の魔法で作られたモンスターである。ミミックと言ったほうが通りはいいだろうね。

ハイドン「ぬう、これ(サファイア)はもらっぺいこう。魔力は感じられるかね？」
キト「調べてみよう。センスマジックは続いているから」
マスター「魔力は感じないな。調べてみると1個が200ガメル相当」
キト「とりあえず俺が持つておこう。」
ハイドン「あああああああああ……、わしのおおお……ワシが22点のダメージを与えたのに……ゲ
ス(笑)」
ウェイク「ただの駄々っ子じゃねえか。」
キト「わかったわかった。魔晶石はもらうからお前に3個やろう、ウェイクには1個な。²⁵」
ハイドン「やったあ！」

このような(少女が冷やかに見ている中で)空しい宝の分配がありの後、次の部屋の探索を
行う。(図 12 まだまだ先へ)

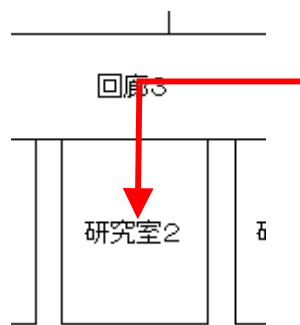


図 12 まだまだ先へ

この部屋では引き出しからメモを見つける。

……装置のスイッチは映像の部屋に

(マスター「スイッチは—」ウェイク「上、上、下、下、左、右、左、右、B、A、ドカーン！(笑)²⁶」)

メモの意味はわからないままにハス向かいの部屋を調べるが、真っ暗であった。なのであきら
めて、もう一つの部屋を調べる。ただし荒らされていたため、ほとんど収穫もなく結局は大部屋に
戻る。(図 13 映像の部屋?)

²⁵ リプレイ聞いて思ったが魔晶石はウェイクとキトで1個ずつもらったのになんでサファイアは同数分配しないん
だ？

²⁶ グラディウスの隠しコマンドね。通称コナミコマンド。ゲーム中にポーズをし、これを打ち込むと1回目は最強状
態になるが2回目以降は自爆する。本気で脚注が必要なネタを喋るなー！

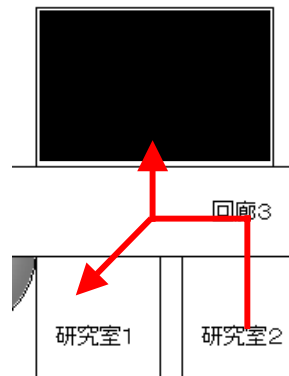


図 13 映像の部屋？

キトは『ライト』を唱えて大部屋に明かりを点す。すると…

マスター「そうすると、部屋は何もない。ただし、正面だけ真っ白に磨き上げられている」
 ウェイク「映像の部屋か！」
 ハイドン「そのようだな」
 ウェイク「スイッチを探せ！」
 マスター「探してみるとスイッチが右手の壁にあるよ。」
 キト「これか。ポチツとな」
 マスター「すると、この部屋の天井に水晶が現れて正面の壁に何かを映そうとしているが(『ライト』により)こっちが明るくて見えねえ」
 ハイドン「じゃあ、『ライト』引っ込めて」
 ウェイク「ぼろ切れで隠せ」
 マスター「じゃあ、『ライト』を引っ込めるとー」
 ウェイク「人妻いんらん天国！²⁷」
 マスター「人妻いんらん天国が始まった(笑)余計な事言うな！で、映像が始まり—見た事はないんだな。城が空に浮かんでたり、皆が魔法を使って浮かせてたり、空飛ぶ船とかがあつて、セージ技能を持っている人はこれが古代王国かなあと思う。」
 キト「それっぽいなあ…」
 ハイドン「そうなのか？」
 マスター「というのが1枚目。場所は古代王国だろうか—ベッドで一人の女性が—」
 一同「(ニヤニヤ…)」
 キト「食い入るように観るよ」
 マスター「今にも息を引き取ろうとしている。で、横で一人の魔法使いが嘆き悲しんでいる。」
 ハイドン「言葉はわからないの？」
 マスター「音声は入っていないからね。で次の映像、その魔法使いは何かを研究しているようだ。何かの装置にこんな模様(螺旋)が、書かれているけど…」
 ウェイク「D・N・A？」
 キト「A, C, G, Tとか書かれているの？」

²⁷ 名前の通り、20歳未満は観れない映画の一種。敢えていんらんとひらがなにしてみたが、「人妻淫乱天国」だと必要以上にエロスが醸し出されてしまい、適切ではないので、最適な配慮をしたと思うよ。うん。

マスター「もちろん、キャラクターはわからないけどね。次の映像、何らかの装置—カプセルとコントロールパネルがあるもの—が完成して魔法使いが喜んでるところ。」

ハイドン「死んだ奥さんを蘇らせる・・・？」

マスター「で、次の映像。で、魔法使いが装置を動かして、その装置のカプセルの中には人がいたんだけど、この人が体が崩れて変な動物になってしまう・・・明らかに他の動物になりきれていないような感じ、最後はその生物は泡になって死んでしまう。」

ウェイク「大失敗だ。」

マスター「魔法使いは明らかに落胆している。」

キット「マ、マージでー？」

ウェイク「軽いな(笑)」

マスター「で、最後の映像はこの装置の封印。扉が閉じられる。で、そこに出てきている扉はこの奥の通路の扉。」

ウェイク「ていうことか・・・。」

ハイドン「さあ、エンドロールも流れたし、帰ろうか(笑)」

この遺跡はこの装置の研究施設である事が判明した。ここで一行は(帰る道もあったが)奥の扉を開け、最後の戦いに赴く。

第7章 闇の無限旋律

マスター「さて、その扉を開けて中なんだが、円筒形の筒、コントロールパネルがあり、その装置のところに君らが見たことのあるコノハがいる。」

ハイドン「んん～？」

マスター「で、装置のそばに木が生えている」

ウェイク「木？」

マスター「で木の幹にジナスの顔があるようにも思える。で枝が伸びていて、ロツソが囚われている。」

ハイドン「ああ～！これはもしや！学芸会の真っ最中！？(笑)」

ウェイク「ジナスちゃんが木になっているのね。なるほどねえ」

ハイドン「ロツソ——ッ！こんなところで何をしている！？」

ロツソ「えーっと、捕まってる(笑)」

コノハ「ついにここまで来てしまいましたか・・・」

ハイドン「お前達！わしらを追けておっただろう！」

ジナス「そう。あのプレートを持っていると言う情報があったからね。結局はロツソが持っていたから良かったんだけどね。」

ハイドン「で、飛んで火に入ったというわけだな。」

コノハ「そういうことですね。たった一人でこの装置をどうにかするなんて愚かな話です」

キット「不二子²⁸みたいなもんだな。」

²⁸ ルパン三世より、峰不二子。まあ、説明は不要ですな。



ハイドン「そうか。このプレートをどうにかすると、この装置が蘇えるというわけだな。」
マスター「そう。プレートは台座に置かれているよ。」
ウェイク「あーんな事やこーんな事もやりたい放題ってなんだな！」
ジナス「冥土の土産に教えてあげるけどー」
ウェイク「メイド？メイド喫茶？」
コノハ「あなた達も見たでしょうけど、この装置は、人の遺伝子を作り変える装置。これを使って我々の組織が不死の命を手に入れるのです。」
ウェイク「いい木偶ができるってことだね。」
キト「結局失敗したじゃないか。」
ジナス「研究すればいいこと。」
ハイドン「考え方(キトと)同じじゃん(笑)」
コノハ「実験材料も3つ増えたしね。」
ウェイク「さて、お暇しますか…」
ジナス「そういうわけにもいかないわ！」
マスター「という、装置を操作して扉が閉まった(笑)」
ハイドン「…私は難しい事はわからんが…その男は仲間なのでな！」
キト「そうだロツソ！俺はお前に用があるんだよロツソ！」
ロツソ「何？」
ウェイク「弁当代と宿代だな」
キト「そうだ。そして積もり積もった利子……500ガメル！耳を揃えて払いやがれ！」
一同「増えてる————ツ！」
コノハ「妙な真似はやめてもらいましょうか。この通りあなたの仲間は我々の手にあるのだから。」
ハイドン「まあ、一応仲間というだけで…(笑)」
マスター「ロツソは落胆している」
ハイドン「ロツソ、お前悔い改めるか？悔い改めるならー」
ウェイク「借金を棒引きしていいこともない！」
キト「オレの借金だよ。²⁹」
ロツソ「まあ、悔い改めるのもいいが、借金を返すのもいいが…お前らにどうにかできるのか？」
ハイドン「できる！このカチ割り丸さえあれば！！！」
キト「斧というのはな、木を切るためにあるんだよ！」
ロツソ「…ハイドン、その斧はどうした？」
ハイドン「この斧か？いいか、いいだろ？…欲しいか？でも、あげない。必要筋力20だから(笑)」
キト「頭の悪い会話だ…」
ロツソ「いや…いらぬ。何故ならオレももらったからだ」
マスター「と言うと、ロツソの下半身が炎となり、燃え出して、ロケットとなり枝を焼き脱出した。」
ハイドン「何をもらったというのだ！」
マスター「よく見るとロツソが持っていたアミュレットが光り輝いている…」
ハイドン「何だ、お前？そんな得意技を持っていたのか！」
ウェイク「いいな、それ。」

²⁹ ウェイクの中の人の法則。興奮すると他のプレイヤーの台詞を取る。

ロツソ「オレもよくわからないがもらったのだよ」
 ハイドン「あの異世界みたいなところでか」
 ウェイク「オレも異世界行きたいなあ・・・」
 マスター「わかった。わかった。お前らは次回な。」
 キト「雷弾の撃てる杖³⁰欲しいなあ・・・(笑)」
 ウェイク「お前は望みすぎだ！」

ジナス「お～の～れ～」
 マスター「さて、戦闘開始になるよ。キトは」
 ハイドン「オレは当然ジナスに向かう」
 ウェイク「俺はコノハだな。」
 マスター「さて、コノハに攻撃したんだがウェイクの攻撃をヒュンと避ける。姿が消えたと思って上を見ると両手が鷲の翼になり、空を飛んでいる」
 コノハ「これが私たちの力よ。人の存在に獣の力を加えた私たちの力。勝てると思ってるの!？」
 ウェイク「神への冒瀆と見なす！」
 マスター「ということで、コノハは上の方に飛んでいった。」
 キト「じゃあ空中戦やってくれ。」
 マスター「うむ。でその方向にロツソは突撃し、ロツソとコノハの高速戦闘が始まった。」
 ウェイク「そこは放っていいってことだな？」
 マスター「うん。俺もロツソのサイコロ振るの面倒だし(笑)」
 ウェイク「で、パターンと落っこってきて「あいつら強いぜ。後は頼んだ」って死んじゃうんだな!？」

死ぬか！マスターのキャラクターなのに！

こうしてコノハに対してはロツソが突撃したため、一行としてはハイドン、キト、ウェイクがジナス1匹の相手をすることになる。(左、またしてもFF)

対ジナス戦となったわけだが、戦闘は既に開始されているので、キトは待機(行動を遅らせる)。ウェイクは先ほどのコノハへの攻撃で行動は使ったことになるのでジナスの番となる。ジナスはハイドンに枝を伸ばし、ハイドンを捕らえる。

マスター「捕まった」
 ハイドン「いやじゃ～！振りほどき。うんがー、ムキムキ～」
 しかし、振りほどけず、3点のダメージを受ける

ここでセージチェックによって判明するがジナスの木の種類は杉であり、行動の度に花粉によ

³⁰ LOTRのリブレイより。名前の通り雷の弾を放てる杖。魔法使いであるファラシオンが所持していたので、そのつながらでキトはもらえらると思つたらしい。あんまり出しすぎるのもあれだから打ち止めだよ。ﾌﾞﾌ



て行動が失敗する可能性がある。かなり厳しい設定
 キト「でも、こいつは動けそうにないんだね」
 マスター「うん。動けない。」
 ウェイク「じゃあさ、弓に『ファイアウエポン』かけてくれれば燃やし放題？」
 マスター「その前にハイドンが絞め殺されなければね。」
 キト「ま、(どっちにしろ)木には火だな。『ファイアウエポン』お前にかけてやる。」
 ウェイク「ちょっと待て、弓に持ち替えるから。」
 キト「じゃあ、『プロテクション』。ロツソにも」
 マスター「捉えられない(笑)」

次のラウンドになり、キトはまたしても行動を遅らせるが、ここでウェイクが…

ウェイク「操作盤からプレートを取り取る。」
 マスター「操作盤からプレートを取り取る……外れない」
 ウェイク「じゃあ、操作盤を叩き壊す」
 マスター「叩き壊す？いいの？ぶっ壊す、あ、そう。いいんだ？じゃあロールして、早く！自分で言ったんでしょ、やるんでしょ(笑)」
 ハイドン「好きなようにしろよ。お前が勝手にやっちゃったことなんだから！」
 キト「ああっ！やめろ————ッて俺が叫ぶよ！」
 マスター「操作盤はぶっ壊れました。すると、視界が赤くなり、アラームが発せられて『異常発生、異常発生！この研究所はあと3分後に爆発します』となったよ(笑)」
 ウェイク「……さて、帰るか」
 マスター「コノハとジナスは「お前らを殺してから脱出すればいいだけだ」とますますやる気を出してるよ」
 ウェイク「やっべえ、かつてない緊張感のある戦いになってきた」
 ハイドン「お前のせいでな。」
 ウェイク「一言多い奴だな」
 マスター「多くない多くない」
 キト「おのれ～、わが野望があ！(笑)」

ウェイクはハイドンをたすけた！



ジナス (コノハ)	ハイドン キト ウェイク ロツソ	しばり しばり	— — たすける とつけき
--------------	---------------------------	------------	------------------------

ますますやる気を出したジナスは更にキトをも捉えようとする。キトは(杉の花粉によって)くしゃみをしてしまい、捉えられてしまう。ハイドンも脱出に失敗し、ハイドンは2点、キトは3点のダメージを受けてしまう。(プロテクションによって軽減)

しかし、次のラウンドはウェイクはジナスの枝を避けてハイドンの救出をサポートし、ハイドンは脱出に成功する。

次のラウンドになり、キトもウェイクのサポートによって脱出するが、このラウンドまたしてもハイドンが捕まってしまう。ただし、即座に脱出をした。

ハイドン「二度とその手を食うかよ！俺生意気キャラなんだ(笑)」

続いてキトがやっとファイアウェポンを唱え、ウェイクのウォーハンマーを強化する。そのままウェイクはジナスに攻撃をし、ダメージを与える。更にジナスの攻撃を避けたハイドンも攻撃を行い、カチ割り丸が・・・

ウェイクがジナスにこうげき！ジナスはもえている		ハイドンがジナスにこうげき！カチ割り丸がほえた！	
			
ジナス (コノハ)	ハイドン キト ウェイク ロツソ	たたかう まほう たたかう とつげき	たたかう まほう たたかう とつげき

ハイドン「与作が木を切るう！ドカーン！」

マスター「更に、カチ割り丸が吼えた。更に追加のダメージ！」

ハイドン「あれ振るの？痛打表？³⁾」

マスター「痛打表はない(笑)けど、さらに3点の追加でトータル18か。」

ウェイク「3ラウンド麻痺！」

カチ割り丸によって必殺のダメージを与えた。

次のラウンドになり、キトの番であるが

キト「コノハはどうしてる？」

マスター「上で戦ってるよ。」

キト「音しか聞こえない(笑)やみくもにスリープクラウドとかかけたら落ちてこないかな？(笑)」

キトは行動を遅らせる。ウェイクはピンゾロによって外す。ジナスは三度ハイドンを狙い、枝によってハイドンを捉える。が、行動を遅らせたキトによってハイドンは脱出する。

ハイドン「お前がいなかったら振りほどけなかったぜえ！」

キト「だろ？(笑)」

³⁾ LOTRのルールから。このルールでは痛打というルールがあり、戦闘で高いダメージがあるとさらにロールをし、独特なダメージ(太股の片方に切りつける、など)を与えることができる。戦闘が非常にバラエティ豊かなものになる。と思っている個人的には



更に次のラウンドもハイドン解放のため、キトは待機する。ウェイクが攻撃し、クリティカルヒットによって、ジナスの動きが止まった。

ジナスはこれらの壮絶なダメージによって戦闘能力を失い、前評判とは裏腹にあっさり倒れた。

更に、ロツソもコノハを倒し、コノハも上から落ちてきた。

ハイドン「ロツソ強くないか？」

マスター「NPCだから(笑)俺がプレイヤーになったらこんなもんじゃない。」

第8章 汚れた生命のレクイエム

マスター「さて、問題のこの後なんだが・・・後1分。」

ウェイク「さあ大変だ。一分あれば充分だ。」

キト「大丈夫かなあ・・・」

ハイドン「操作盤はどうなってるの？操作ふぁ出来ないほど粉々？」

マスター「うん。誰かがやっちゃったからね」

ウェイク「プレートは残ってるんでしょ？プレートを取って、扉に当ててみる」

マスター「……………何もおきない」

ハイドン「他の出口を探す！」

マスター「あと1分で？見渡す限り、見つからないよ。ない！上にも下にもない」

キト「出口はあそこだ、壊すんだ！」

ハイドン「うんが——っ！」

しかし、扉を叩き壊すこともできない。明らかに魔法的な力によって護られている。

キト「『アンロック』！！」

マスター「(そろそろ何とかしてやるか)残り10秒。そうすると、少女が「みんな集まって！」」

ハイドン「へ？喋った！」

少女「早く！」

ハイドン「よくわからんが近くに！」

マスター「さて、君たちが近くになると、光り輝いて、君たちは意識を失った。そうするとその少女の声が頭の中に聞こえてくる」

少女「結果的にはありがとうございました(笑)」

ウェイク「結果的にはってことは・・・あんまりよくなかったのか」

少女「あの装置を悪意のある者に使わせないようにすることが、私の務めでした。私はこの遺伝子変化装置のコントロールユニットだったのです？」

ハイドン「コントロールユニット？」

一同「キョーン」
少女「何と言うか……あの装置の精霊だと思ってください。」
ウェイク「なるほど」
少女「これから、最後の力を使ってあなた達を脱出させます。」
マスター「と言うと、君たちは空高く浮かんでいった。で、眼下では一遺跡が大爆発を起こしている(笑)」
キト、ハイドン「……」
ウェイク「結果的には良かったって言ってるんだからいいじゃんよ。」
少女「他にも私の姉妹達があります。私の姉妹達が悪の手に落ちないようにお願いします。さようなら」
ウェイク「え？こんなのがまだあるの？」
ハイドン「お願いされても……？」
キト「お前達の姉妹が、俺の手の中に(笑)」
マスター「で、君たちは気がつくまで遺跡から1,2km離れたところで目が覚めた。遺跡があったところには湖ができてしまいました。クレーターができ、アウラ川の水が流れ込んでできたものです」
ウェイク「この湖をエミリン湖と名付けよう。」
マスター「ということで、何とか遺跡から脱出し、軽く地形が変わりました。」
ウェイク「ロツソは？」
マスター「ロツソもいるよ」
ウェイク「さて、どういうことが説明してもらおうか。」
ロツソ「それは次回で」
一同「キョーン」

こうして、多くの犠牲を払い、何とか脱出に成功した一行であるが、この事件を引き金として更に大きな事件へと巻き込まれる事になることは当然、認識の範疇外であった……

続く

おまけ・地図



あとがき

気づいたと思うけど今回の各章のタイトルは音楽だからね！気になるなら調べてみ！（挨拶）

うーん・・・このやり方ねえ・・・ありかも（ニヤッ

ということで第1部から1ヶ月経たず、第2部が仕上がりました。カットした部分は多いように見えるけどうまく調節しているので、ストーリーが追えて、かつ笑いの取れるものにもなってる。はず！とにかくリプレイを書くのは大変だからねえ。何とかこのやり方をうまくできるようになればいいね。ま、もっとも自己満足の領域だけだな orz

さて、シナリオ内部についてですがマスターが私に切り替わってから最初なのでロツソはNPC扱い、失踪。なぜなら使うのが面倒くさいから。PCがうまく追ってくれるかがアレだったけどまあ宿代ふっ被せれば楽勝てなもんよ。

ちなみに、話としては極めてオーソドックスの追跡&ダンジョン探索ものにしました。とりあえずこの形式だけはしばらく踏襲するつもり・・・と書いたけど次の第3部では大きく変わってます。だってやってみたかったんだもんアレを！

ただ、何かしら地形を変えるのはゆるぎなく進めています。特に意味があるわけじゃないけど、話のスケールをデカくするには便利だね。

逆に私はソードワールドの世界（フォーセリア）については知識があまりないのでサイランドという舞台でとりあえず好き勝手やらせてもらおうかな、という感じです。フォーセリアだったらそうそう街とか潰しちゃダメだろうしね。

それから、カチ割り丸。折角だから出そうと思って出しちゃいました。幸いにも使うプレイヤー（中の人）が代わっているため、うまい事継承もしてくれているし、評判も強さも良かったとしましょう。あと今後他の連中のアイテムを出すかだけど、一人は確定。残りは未定・・・いくら何でもそんなにポンポン出すもんじゃあないでしょう。ネタも尽きるし。

もちろん、ストーリーとしての繋がりも考慮していますよ。何しろLOTRでは「その後、あの二人の姿を見た者はいない」って書いたもんね、書いたもんね！

あと、最後に。今回の敵であるジナス、コノハですが、元ネタは**あります**。二人は○○○○○！から。アナグラムだから知る人は知ってください。一発キャラだけだね。

それでは、この時点で最終話のシナリオまでできていますが、第3部のリプレイで会いましょう。

2006/09/06